

雪の結晶を世に出した古河城主

古河市中心三丁目。古河歴史博物館や古河文学館等が建つ市内きっての文化ゾーン。歩くと、隣接の市立古河第一小学校に至る歩道に図形らしき文様がみえる。よくみると、同校の扉や一般駐車場の案内板にも同じ六角形の文様があしらわれている。

いずれも雪の結晶を図案化したものだ。なぜ、雪の結晶なのか。同校発行の『郷土資料室「出城歴史館」目録』に次のような一文がある。『『雪華図説』：古河の殿様土井利位が調べた雪のけっしょうを記録した本』と紹介。

続けて「利位は政治のあいまをみて、かんたんなけんびきょうで研究したといわれる。2さつの本に195のもようを記録した。市内の小学校の校章は、この雪の図をもとにしている」と。

古河歴史博物館発行のパンフレット『雪の殿さま土井利位』にも雪の結晶をデザイン化した工作物を紹介している。「古河市立学校の校章」、「博物館『あかりの塔』」、「駅東口モニュメント『ゆきはな』」、「第一小学校わきの歩道」等々。

まさに雪の結晶は、古河市のシンボルである。その雪の結晶を世に出した土井利位は、古河藩主、土井家の分家にあたる刈谷藩（現愛知県刈谷市）の出である。刈谷藩城主、土井利徳の四男として寛政元年（1789）に生まれた。

本家古河藩10代藩主、土井利厚の嫡男が早世したことから、文化10年（1813）、利厚の養子に迎えられることになった。古河城に移った利位は、文政5年（1822）、古河藩8万石の第11代城主に就任した。

利位を一躍有名にした『雪華図説』は、天保3年（1832）に刊行された。利位が雪の結晶の観察を始めた動機を『古河市史』は次のように記す。「側近の鷹見泉石から、蘭書マルチネット著『格致問答』を教えられたからである」と。

この本は、自然の成り立ちを問答形式でまとめた自然科学書で、雪も取り上げている。利位は、当時、珍しい顕微鏡を手に入れ、雪の結晶の観察を始めた。その様子を利位自らが『雪華図説』に記録している。

土井利位

Toshitsura Doi

その意識部分が同博物館発行のパンフレットに載っている。「雪の降りそうな天候となった時、あらかじめ黒色の漆器を空気中にさらして冷却し、そこへ雪の片をうけて観察する。吐息のかからぬように注意し、雪片をピンセットでつまみ、手の温度が伝わらないよう気をつける。鏡で光を当てればさらに美しく燦然と輝く」とある。

利位は20年にわたって観察した雪の結晶をスケッチし、「雪華」と名付けた。天保3年発行の『雪華図説』に86種とマルチネット著作掲載の12種を収録。天保11年（1840）発行の『続雪華図説』には97種を採録した。

利位は最初の『雪華図説』を世に出した2年後の天保5年（1834）、大阪城代を拝命。天保10年（1839）には江戸城本丸の老中に就任している。『続雪華図説』はその翌年の発刊である。激務の合間を縫って研究を続けていた。利位は嘉永元年（1848）にこの世を去った。

しかし、2冊の『雪華図説』は、日本で初めて刊行された雪の結晶を観察した図鑑となった。利位が採録した計183種の雪の結晶は、日本の自然科学の先駆けを示す貴重な文献にとど

まらず、今でも多くの人々に夢とロマンを与え続けている。（文中敬称略）

主な参考文献

- 『古河市史 通史編』（昭和63年、古河市史編さん委員会編集）。『郷土資料室「出城歴史館」目録』（平成8年、古河市立古河第一小学校発行）。『雪の殿さま土井利位』（古河歴史博物館発行）等



雪の結晶をあしらった駐車場案内板＝古河市中心三丁目、古河市立古河第一小学校（筆者撮影）

偉人から読み解く「自然から美しさを取り出す」ヒント

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一